

第二言語環境における学習ストラテジーの使用： 自律的学習の実現をめざして

著者	英保 すずな
雑誌名	関西外国語大学留学生別科日本語教育論集
巻	16
ページ	99-110
発行年	2006
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00005891/

第二言語環境における学習ストラテジーの使用 — 自律的学習の実現をめざして —

英保すずな

要旨

学習者が第二言語環境でどのような学習ストラテジーを多用するかを観察し、その結果をもとに自律学習における教師の学習支援のあり方について検討する。

【キーワード】 学習ストラテジー、自律学習、学習支援

1. はじめに

外国語として日本語を学習してきた学習者にとって、たとえ日本語学習経験が多少あったとしても、留学生生活直後は右も左もわからぬ不安に満ちたものであろう。それは消化しやすく栄養価の考慮された離乳食を消化しやすい状態で与えられてきた赤ん坊が急に成人食に切り替えられる状況にたとえられるかもしれない。教室から一步外に踏み出せばそこは見るもの、聞くものすべてが日本語の世界、いきなり様々なレベルや種類の日本語に晒されるのである。勇気を出してコミュニケーションを試みてもそこには母国の教室で与えられていたようなインプットの調整もフィードバックもなく、何をすることも言語能力の限界を超えたタスクをこなすことを要求される。目の前に並べられた「成人食」の中から消化しやすく栄養価も高く、しかも自分の嗜好に合ったものを自分の「経験もしくは直感」により選別し、食さねばならない状況におかれるわけである。ここでの「成人食」は言うまでもなく教室外の様々な言語リソースであり、「経験や直感」とは学習者が学習タスク遂行のために利用している「学習ストラテジー」をさす。

言語習得は膨大な時間を要するものだが、教室で教師の管理のもとで学習する時間には制約がある。それはつまり、言語の習得は通常、教室外で、教師が不在の条件下で起こるということを示唆するものである。この教師不在の環境で学習者が学習を進めていくときに重要な役割を担うのが学習ストラテジーである。学習者は環境とインターアク

ションし、そこから得られるインプットのうち自分の運用能力に見合ったものを学習リソースとして利用しながら自分の力で学習を進めていくと考えられる。この、学習者が主体として管理していく学習過程が自律的学習と呼ばれるものである。田中・斉藤(1993)はこの自律的学習の枠組みから学習ストラテジーを、環境の中から学習に役立つもの(学習のリソース)を選択して、それに対して自らの学習に有効であると考えてインターアクションするときの手段・方法であると定義している。

言語教育における関心は、学習者に「何を教えるか」という教師主体のものから学習者が「どう学ぶか」という学習者の主体的な役割を認めるものに変化し、それとともに言語学習にかかわる学習者個々の要因に目が向けられるようになってきた。学習者の多様性に注目した習得研究が広く行なわれ、近年では新しい言語教育のかたちとして学習者が主体的となって自分の学習の管理する「自律的学習」が注目を集めている。その学習の中核機能をつかさどる学習ストラテジーの役割は大きい。

本稿では留学初期段階における学習者のストラテジー使用の実態を学習日記の記述と合わせて検討し、その結果を第二言語学習環境における学習者のストラテジー使用の様相を浮き彫りにするとともに、学習ストラテジーの意識化を通じて学習者の自律的学習能力を高めていけるような指導について検討していきたい。

2. 調査

2.1 調査目的

学習者のストラテジー使用の傾向に留学環境という要因がどう関わっているかを調べ、これを言語学習日記の記述に照らして検証することにより、今後の留学生指導の指針を得る。

2.2 対象

一学期(4ヶ月)あるいは二学期(8ヶ月)の予定で来日し、関西外国語大学留学生別科で日本語会話クラスレベル2および3(日本語初中級レベル)を履修する、留学経験が初めての学習者を対象に調査を行なった。質問紙による調査は留学生が来日した直後の9月初旬と、その2ヶ月後の11月初旬の2回に分けて行い、1回目の調査で76名から、2回目はそのうちの55名から回答を得ることができた。このうち筆者が担当する会話レベル3の学習者39名にはクラス課題として期間中3回にわたり2週間の学習記録をつづった学習日誌を提出させた。

2.2 データ収集

本調査では学習者がどのような学習ストラテジーを使い、またそれが2ヶ月の間にどのような変化を示すかを量的、質的両面から探るために、次の二種類の調査方法を用いデータを収集した。

- I. 質問紙調査：言語学習のためのストラテジー使用調査 SILL(Strategy Inventory for Language Learning VERSION 5.1、Oxford 1979) (資料1)
- II. 言語学習日記

I は留学開始時から2ヶ月の間にストラテジー使用に変化が見られるかどうかを調査するために使用した。2回目の調査では1回目に回収した質問紙のコピーを渡し、2ヶ月前の回答と比較して回答させた。

II は自由記述式で、言語学習やそれにともなう感情を自由に表出するように指示したが、これと合わせて Oxford(1990)のストラテジートレーニングを目的としたワークシート、Opportunity knocks! (資料2)を配布し、その指示に従って言語学習機会を毎回思いつくままに列挙させた。これは教室内教室外を問わず利用できる学習リソースとして学習者がリストアップした項目から学習者の学習環境に対する意識度を探ると同時に、日記を書くにあたってストラテジーの概念そのものに言及することなく言語学習について意識化を行なわせるためである。

2.3 データの分析方法

まず SILL の結果から留学生の学習ストラテジー使用傾向を調べるとともに、2ヶ月の滞在期間でストラテジーの使用にどのような変化が見られるかを1回めと2回目の調査結果の比較・分析により検証した。

次に、2週間ずつ、3回にわたって提出させた言語学習日記から、ストラテジーの使用の変化に関わる記述を抽出し、これを分析の補助資料とした。

3. 調査結果

3.1 学習ストラテジーの使用の変化

留学開始直後ならびに2ヶ月経過後における学習者のストラテジー使用の変化を Oxford のストラテジー分類にもとづいて表1、図1に示すとともに、SILL の50項目の

個別の変化を表2に示した。図2はOxfordのストラテジー分類である。また、学習日記において学習者が毎回リストアップした学習リソースを言及回数の多かったものから5項目、人的、物的、社会的リソースの分類で図3にまとめた。

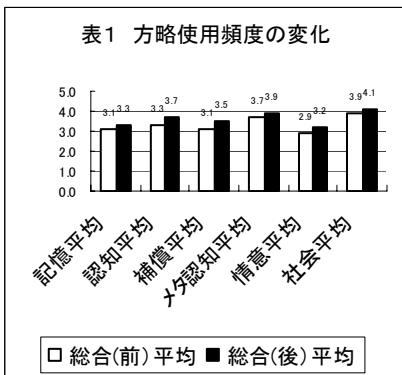


図1 留学2ヶ月後のストラテジー使用頻度変化

	2ヵ月後	留学開始時	差	差のt値	有意差
記憶	○3.327	○3.058	0.269	3.043	●
認知	◎3.655	○3.342	0.314	2.898	●
補償	○3.454	○3.122	0.332	2.974	●
メタ認知	◎3.926	◎3.765	0.161	1.393	
情意	○3.151	△2.903	0.248	2.158	●
社会	◎4.100	◎3.866	0.234	1.851	

標本サイズ：(55, 76) 両側5%点：1.979

◎高頻度使用(3.5-5.0) ○平均度使用(3.0-4.49) △低頻度使用(-3)

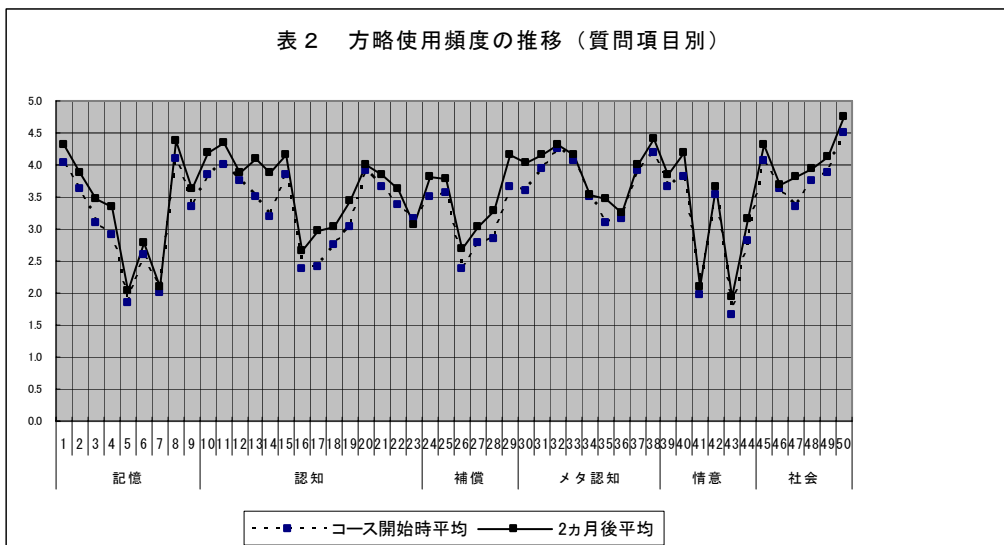


図2 学習ストラテジー：Oxford の分類

<p>(直接ストラテジー)</p> <p>1. 記憶ストラテジー</p> <p>知的連鎖を作る イメージや音を結びつける</p> <p>2. 認知ストラテジー</p> <p>練習をする 情報内容を受け取ったり送ったりする 分析したり推論したりする インプットとアウトプットのための構造を作る</p> <p>3. 補償ストラテジー</p> <p>知的に推論する 話すことと聞くことの限界を克服する</p>	<p>(間接ストラテジー)</p> <p>4. メタ認知ストラテジー</p> <p>繰り返し練習する 動作に移す (間接ストラテジー) 自分の学習を正しく位置づける 自分の学習を順序だて、計画する 自分の学習をきちんと評価する</p> <p>5. 情意ストラテジー</p> <p>自分の不安を軽くする 自分を勇気づける 自分の感情をきちんと把握する</p> <p>6. 社会的ストラテジー</p> <p>質問をする 他の人々と協力する 他の人々へ感情移入をする</p>
---	--

図3 留学生が利用している学習リソース (言及回数順に配列)

【人的リソース】

1. 日本人の友人
2. ホストファミリー
3. スピーキングパートナー
4. 留学生
5. 店員、ウェイトレスその他

【社会的リソース】

1. 日本人とバー、クラブ、カラオケに行く
2. 電子メールや手紙のやり取り
3. クラブ、サークル活動への参加
4. イベント、祭り、旅行
5. 家庭訪問、大学主催の日本体験プログラム

【物的リソース】

1. テレビ、ビデオ、映画
2. 音楽、ラジオ
3. マンガ、アニメ
4. 本、新聞、雑誌
5. 広告、標識、商品ラベル

表1、図1が示すようにストラテジーの使用頻度は1回目、2回目ともに社会的ストラテジーが最も高く、メタ認知、認知がこれに続く。2ヶ月の間で有意の差が見られたのはストラテジーの6グループのうち記憶、認知、補償、情意の4グループであった。次に各ストラテジーの使用頻度の変化について考察する。

3.1.1 社会的ストラテジー

(社会的ストラテジーに関する記述の抜粋)

学習者 1 (以下 L1) : 日本人の友達と話すことで満足してしまい、学習がルーティン化している。ただ 彼らと話すだけでなくもっと具体的な目標を立てて努力しなければ上手になれない。

L2 : 日本人同士で話し始めた途端に理解困難になるので、複数の日本人と話すより一対一で話すほうが練習のためには良い。また、グループで話すときは少人数のグループで話したほうが会話に参加しやすく、また自分以外の留学生がいないほうが自意識過剰にならずリラックスして話せるという点で望ましい。

L3 : 小学生に数学を教えるボランティア活動に誘われて行って見たが、周囲の人は私を見て戸惑ったようだった。自分が何かしてあげられたという実感がなく、通訳の手を煩わせただけで、むしろ邪魔だったような気がした。今後また行くべきかどうか迷う。

留学という環境では社会的ストラテジーの使用頻度が高くなることを予想していたが、前述のとおり 2 ヶ月の間に有意の差は見られなかった。これはこのストラテジーの使用頻度が留学開始時点から高かったこと、また社会的ネットワークなどが根づき、活性化するには 2 か月という期間が十分でなかったことが起因しているかもしれない。社会的ストラテジーは友人を作ったりネットワークを形成したりという、他者との関わりを通じて言語習得を行うために使用されるストラテジーであり、ネウストプニー(1995)はこれを、ストラテジー分類のヒエラルキーを考えたときに最上位に置かれるべきものであるとして重要視している。項目別で有意の差がみとめられたのは 47 番の”I practice Japanese with other students”であるが、これは日本語習得という目的を共有する留学生同士が学校あるいは留学生寮で互いに練習したり、教えあったりという学習ネットワークを形成してきたことの表れかもしれない。また、当然のことながら留学期間中に日本人のネットワークをできるだけ言語学習のリソースとして活用しようとする意欲も学習日記を通じて感じられた。あらかじめ大学で用意されている各種イベント・交流プログラムの参加・サークル加入に加え、自らサークルを立ち上げたり、インターネットのブログに参加したりといった活動を通して積極的に日本人との交流機会を広げようとしていることもうかがえた。また、単にネットワークを形成するにとどまらず、それをもとに

新たに具体的な目標を立てることの必要性を認識する L1 のような例や、自分のニーズや言語運用能力に最もかなったインプットが得られる状況を模索する L2 のような例も見られる。学習リソースも図 5 が示すように人的なものにとどまらず、テレビや映画などのメディアネットワーク、あるいはカラオケを通しての日本人との交流や電子メールを使ったチャット等の社会的ネットワークが積極的に利用されている。しかしその一方で、うまくネットワークを作れず、環境とのインターアクションに消極的になっている L3 のような例も見受けられる。

3.1.2 メタ認知ストラテジー

(メタ認知ストラテジーに関する記述の抜粋)

L4: 授業で習った項目を実際のコミュニケーションすぐ使ってみることができるのはすばらしい。私は何でも書かなければ学習できないタイプだと思っていたが、これまで「机上」で勉強していた日本語が今は自然に身についていくようだ。日本語が上達したことを実感している。

L5: 単語は書いて読んで覚えるようにしているが、頭の中で何かがクリックしたような瞬間があってその単語が習得されるような気がする。自動詞他動詞はなかなか無意識で使えるレベルにならない。

L6: 日本人と話しているときにいろいろなことばを教えてもらうが、そのときは覚えてもすぐ忘れるので、いつも書きとめられるように小さいノートを携帯することにした。

メタ認知ストラテジーは学習環境を整えるためのストラテジーである。学習の計画を立てたり、学習過程をモニター・評価するようなストラテジーがこれに相当する。社会的ストラテジーと同様、留学開始時点から高頻度で使用されていたこともあり 2 ヶ月で有意の差はみとめられなかったが、学習者が自分自身の学習達成度のみならず習得のパターンについても強い関心を抱いていることが日記からうかがえる。日記には L4 や L5 に代表されるように、自分の日本語の習得を客観的にモニターしていることを示す記述が多く見られた。また、L6 のように、学習過程で直面する問題に対処すべく具体的なストラテジーを模索している例もいくつか観察された。項目別に見ると留学環境における学習を反映し、30 番の、”I try to find as many ways as I can to use my Japanese”という、実践の機会を見つけるというストラテジーの使用頻度に有意差が見られた。

3.1.3 認知ストラテジー

(認知ストラテジーに関する記述の抜粋)

L7：日本人が話す英語に日本語の構造が反映している。面白いので観察しているが、それが自分の日本語学習に役立つことがある。

L8：日本語は私にとっては4番目の外国語だ。日本語の語彙表現はすべてイメージでとらえる。たとえば第三言語やそれ以外の言語に訳すということとはしない、というよりできない。

認知ストラテジーは言語タスクを遂行するために目標言語を操作したり変換したりするストラテジーで、教室環境における学習で使い慣れた、学習者にとってはなじみの深いストラテジーである。日記には日本語の構造を母語との比較によって観察する記述が多くみられた。パターンに注目するというストラテジーではL7の例は興味深い。L8は日本語が4番目の外国語学習というヨーロッパ系の学習者だが、学習者が多様化する中で、個々のストラテジー使用のパターンもまた多様化していることを示唆するものである。項目別では10番 ”I say or write new Japanese words several times”, 13番 ”I use the Japanese words I know in different ways”, 14番 ”I start conversations in Japanese”, 17番 ”I write notes, messages, letters, or reports in Japanese”のそれぞれに有意の差がみられる。10番以外は自然の状況の中で「練習する」タイプのストラテジーであり、いずれも留学環境を反映した結果であると考えられる。

3.1.4 補償ストラテジー

L9：合気道のクラブで友達と話すときはアクションが伴うのでたいへん分かりやすい。

補償ストラテジーは言語の理解や発話などで能力を超えたタスクが与えられたときこれを克服するために用いられるストラテジーだが、言語運用力がまだ十分に備わっていない中上級学習者にとっては、自然環境でコミュニケーションを行なう際に特に必要となるストラテジーである。造語したり、分からないことばを別のことばで言い換えたりという緊急措置的なものがこれに相当する。直接言語習得に寄与するものではないが、コミュニケーションの挫折を回避するという意味では社会的ストラテジーと同様、学習者が自律的に学習を進めるプロセスにおいてきわめて重要なストラテジーであると考えられる。特に留学環境においては不特定多数の母語話者との接触で調整されぬインプットを受けたり、自己の言語能力を超えるタスクを要求されることが多くなると考えられ、

それが2ヵ月後の補償ストラテジーの使用頻度に有意の差をもたらしたと考えられる。項目別では24番“To understand unfamiliar Japanese words, I make guesses”、28番“I try to guess what the other person will say next in Japanese”、29番“If I can't think of a Japanese word, I use a word or phrase that means the same thing”の補償ストラテジーグループ6項目中で3項目の使用頻度に有意の差が見られた。

3.1.5 記憶ストラテジー

L10: 語彙を習得することが必要だ。自分が英語で使う語彙に相当する日本語の単語をすべてマスターしないと本当に言いたいことは言えない。

記憶ストラテジーの使用頻度も2ヶ月で上昇を見せた。項目別では1番“I think of relationships between what I already know and new things I learn in Japanese”、4番“I remember a new Japanese word by making a mental picture of a situation in which the word might be used”、8番“I review Japanese words”に有意差が認められた。多くの学習者が日記の中でコミュニケーションがうまく行なえない大きな理由として単語や表現の知識が不十分なことを挙げており、語彙知識がコミュニケーションの成否を分ける鍵のように考えているL10のような学習者も少なくない。こうした学習者のビリーフに加え、生活上必要とされる語彙が留学環境で増加することや、単語テストや復習テストが頻繁に行なわれる留学生別科の学習環境などがあいまって記憶ストラテジーの使用頻度が上昇したとも考えられる。

3.1.6 情意ストラテジー

L11: クラスでは指名された時、間違っただけをいうのが嫌なので自信のないときは答えないことがよくある。間違いを恐れているのは上達しない。もっと勇気を出して話す努力をしよう。

言語学習には不安感や自尊心といった要素が深く関わっており、これをうまくコントロールできるかできないかが学習の成否に大きく影響するとも言われている。情意ストラテジーの平均使用頻度は1回目、2回目とも特に高いとは言えないが、グループ全体の平均の伸びには有意差が見られた。40番“I encourage myself to speak Japanese even when I am afraid of making a mistake”の使用頻度に有意の差が認められた。日記においても39名中13名がこのことに言及していた。その他、言語学習に伴う不安や無力感を訴

える記述が多く見られた。

4. 結論

SILL 調査と日記の記述から、留学生が言語学習において学習環境を整えたり、学習上の問題に対処するために様々なストラテジーを使い分けながら学習を進めていることが分かった。また、その中でも特に学習をサポートしてくれるネットワークを得るために周囲の様々なリソースを活用していることも示された。

しかしその一方で、不安感や曖昧さへの耐性の低さ、自尊心といった心理的要因により外界とのインターアクションに消極的になっている学習者、教室外の社会的ネットワークにアクセスはするものの、適応能力が十分でなかったり、適応するためのストラテジーを持ち合わせていないためにその貴重なリソースを持続活用できずにいる学習者の存在があることも忘れてはならない。

ネウストプニー(1999)は外国語学習をその管理者によって3つのタイプに分けている。教師管理の形態、学習者管理の形態、そして管理者不在(自然習得)の形態である。第二言語環境で言語を学ぶ場合は特にその二番目の、学習者管理の形態でいかに学習を効果的に進められるかが習得の成否を分ける鍵になる。そのためには 田中・斉藤(1993)が指摘するように学習者に自己の学習を意識させ、ストラテジーの使用を意識させ、潜在的自律学習能力を活性化させることが必要である。学習者が「学び方」を学び、学習の自律メカニズムを確立すれば、教師がいなくとも学習は持続していく。語学教育におけるその有効性は改めて論じるまでもないだろう。

そのひとつの可能性として、ダイアログジャーナルのような学習記録を用いて学習プロセスを意識化させるということが考えられる。書くことによって学習者は自分の学習を内省し、客観的にそれを評価することができるだろう。教師も学習の支援者としてそのプロセスに参加し、必要なときはアドバイスをあたえることができようし、また学習者のニーズを把握することにより教室活動に変化をもたせたり、アプローチを変えたりすることが可能になるはずだ。

教師が支援者としての新しい役割をどのように担っていくかについてはまだ明確な指針が見えないが、個人レベルでもこうした活動を段階的に導入し、その取り組みを通して教師自身もその支援者としてのストラテジーを模索していく必要があるだろう。

参考文献

- Oxford, Rebecca L. (1990) *Language Learning Strategies*. Heinle & Heinle Publishers
田中望・斎藤里美 (1993) 『日本語教育の理論と実際』大修館書店
ネウストプニー, J.V (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店
宮崎里司, ネウストプニー, J.V (1999) 『日本語教育と学習ストラテジー』(共編著)
東京：くろしお出版

(s_abo@kansaidai.ac.jp)

資料 1 STRATEGY INVENTORY FOR LANGUAGE LEARNING (SILL)

Version 5.1 © R. Oxford, 1989

1. Never or almost never true of me
2. Generally not true of me
3. Somewhat true of me
4. Generally true of me
5. Always or almost always true of me

Part A

1. I think of relationships between what I already know and new things I learn in Japanese.
2. I use new Japanese words in a sentence so I can remember them.
3. I connect the sound of a new Japanese word and an image or picture of the word to help me remember the word.
4. I remember a new Japanese word by making a mental picture of a situation in which the word might be used.
5. I use rhymes to remember new Japanese words.
6. I use flashcards to remember new Japanese words.
7. I physically act out new Japanese words.
8. I review Japanese lessons often.
9. I remember new Japanese words or phrases by remembering their location on the page, on the board, or on a street sign.

Part B

10. I say or write new Japanese words several times.
11. I try to talk like native Japanese speakers.
12. I practice the sounds of Japanese.
13. I use the Japanese words I know in different ways.
14. I start conversations in Japanese.
15. I watch Japanese language TV shows spoken in Japanese or go to movies spoken in Japanese.
16. I read for pleasure in English.
17. I rite notes, messages, letters, or reports in English.
18. I first skim a Japanese passage (read over the passage quickly) then go back and read carefully.
19. I look for words in my own language that are similar to new words in Japanese..
20. I try to find patterns in Japanese.
21. I find the meaning of a Japanese word by dividing it into parts that I understand.
22. I try not to translate word-for-word.
23. I make summaries of information that I hear or read in Japanese.

Part C

- 24. To understand unfamiliar Japanese words, I make guesses.
- 25. When I can't think of a word during a conversation in Japanese, I use gestures.
- 26. I make up new words if I do not know the right ones in Japanese.
- 27. I read Japanese without looking up every new word.
- 28. I try to guess what the other person will say next in Japanese.
- 29. If I can't think of a Japanese word, I use a word or phrase that means the same thing.

Part D

- 30. I try to find as many ways as I can to use my Japanese.
- 31. I notice my Japanese mistakes and use that information to help me do better.
- 32. I pay attention when someone is speaking Japanese.
- 33. I try to find out how to be a better learner of Japanese.
- 34. I plan my schedule so I will have enough time to study Japanese.
- 35. I look for people I can talk to in Japanese.
- 36. I look for opportunities to read as much as possible in Japanese.
- 37. I have clear goals for improving my Japanese skills.
- 38. I think about my progress in learning Japanese.
- 39. I try to relax whenever I feel afraid of using Japanese.
- 40. I encourage myself to speak Japanese even when I am afraid of making a mistake.
- 41. I give myself a reward or treat when I do well in English.
- 42. I notice if I am tense or nervous when I am studying or using Japanese.
- 43. I write down my feelings in a language learning diary.
- 44. I talk to someone else about how I feel when I am learning Japanese.

Part F

- 45. If I do not understand something in Japanese, I ask the other person to slow down or say it again.
- 46. I ask Japanese speakers to correct me when I talk.
- 47. I practice Japanese with other students.
- 48. I ask for help from Japanese speakers.
- 49. I ask questions in Japanese.
- 50. I try to learn about the culture of Japanese speakers.

資料 2 OPPORTUNITY KNOCKS!

In Column 1, list all the opportunities that you can think of for practicing the new language in any of the four language skills: listening, reading, speaking, and writing. These can be existing opportunities or opportunities that you might create. Be specific! Example: reading a newspaper in the new language every day.

In column 2, next to each opportunity you have just listed (see Column 1), indicate whether or not you are now taking advantage of that opportunity. If yes, write ○; if no, write ×.

Column 1	Column 2
List opportunities	Now taking advantage? Yes = ○, No = ×
a.	
b.	
c.	
d.	
e.	
f.	
g.	